

空



2013・8

**SORA** 50号

# 浮人形

柴田 佐知子

名を書いて形代の白まさりたる

長靴で家に入りぬ出水あと

足洗ふ水を残して水を打つ

背骨より涼しくなりし正座かな

適当に水落しゐる作り滝

心中のごとく湖心へボート漕ぐ

陶枕にのせし頭の固くなる

浮人形飽かれて水に遠くあり

悪相となるまで岩の灼けてをり

いづこへと問へば青嶺と雲水は

青空も海もたつぷり燕の子

—「俳壇」八月号より—

サングラスかけて火の山領したる

長き箸使ひたがる子曰草

絵日記の兄より大きく兜虫

作文も算数も蟬時雨かな

訴へといふは天向き油照り

高札をうしろに首や夏芝居

池ひとつ押さへつけたる大鯰

預かりてもて余したる日焼の子

九十の母に余れる寝莫塵かな

何事も変はらぬ水を打ちにけり

潮風 高倉和子

顔を拭く熱いタオルや麦の秋

袋掛終へたる山の震へだす

田水張る動き出したる大地かな

ていねいに案内されたる夏館

退屈な話はじまる水中花

天守閣あとの夏草揃ひけり

潮風に吹かれ通しの青田かな

髪洗ふ母の一日長かりし

鯉の死 中田みなみ

ほととぎす水に夜明のひろがりぬ

陣屋にて五句

梅雨冷えや甲冑いよよ奥目にて

脇息の絹擦れひかる梅雨晴間

彫金の凹にかすかな青葉冷え

浦島草竿短かくてうなだれし

藻の花のたゆたひ鯉の死を飾る

わんわんと羽蟻とび出し日を汚す

蟻地獄に何も落ちない夜の来し

遥かなるもの 荒井千佐代

草いきれ 服部早苗

眼鏡屋は総硝子張り新樹光

神鏡にかの世の映る青葉光

荒梅雨の水脈すぐ消えて双胴船

「万葉の小径」などうそ草いきれ

井伊直弼公墓所

戒名に柳の一字風薫る

白南風やむかし倉庫のピアホール

心まで遮る深き夏帽子

ちちははの二重虹なり駆けゆかむ

透かし見る骨の細さや白団扇

病院に屍出る道濃あぢさゐ

牡丹散る齡かぞふるごとく散る

母の忌の近づく夏の織月よ

虫干や不帰の旅路のどのあたり

半夏生けだものにある藻の匂ひ

水無月の街へ出でゆく傘は舵

恋といふ遥かなるもの梅を干す

大南風

柴田志津子

戯れあひて草に溺るる子猫かな

柿の花落つる地蔵の前うしろ

海遠き防塁跡や松の花

航跡の渦立ちあがる大南風

薫風や貌より太き石狐の尾

人の恋遠く聞きをり罌粟の昼

砂鉄出て栄えし河口夏つばめ

ビル谷間入道雲の割り込めり

爆音

だいじみどり

万病を祓ひ給へる夏越祭

爆音は雲の中よりかきつばた

こんなところあんなところへ葎の花

守宮かと問へば蜥蜴と答へけり

花園の百合の花粉に要注意

雷鳴へ部屋中の鍵掛けにけり

膝上げて石段登る薄暑かな

籐椅子の座り心地をあらためて

蝉時雨  
野上 杏

菖蒲一对相撲の神に奉る

這松を翔つ雷鳥の胸白し

ありあまる水の沓や座禅草

蝉時雨火伏の護符の重ね貼り

茅花流し声おとしみる城の井戸

裏方が好き溢蚊に刺されても

湯上りの梅雨満月を真正面

食卓に朝の日差しやさくらんぼ



福岡 矢野百合子

一本の幹百畳の藤すだれ

恋文を開くごとくに粽解く

麦秋や赤子の手足よく括れ

仲見世の人に煙に酔ひて夏

登山靴頂見では締め直す

福岡 あさなが捷

蒼天や目ばかり動く日焼の子

山風のもみぢ色して来たりけり

引き際は人に委ねず鰯雲

鶏頭や一度生まれ一度死す

磨かれし廊下月光走り来る

福岡 亀井紀子

炎天や機影被さる赤瓦

炎天や瑛瑯看板目印に

一斉に起立・礼あり夏衣

その昔蛇の通ひし梁とかや

夏菊を挿して祖父母と向き合へり

粕屋 吉田 菫

御納戸に白蛇出でし母郷かな

無花果や生家に知らぬ人の住む

大蛇祭骨格正しく組まれたる

眼を入れておろちとなりぬ夏祭

大蛇山口に赤ん坊さし出して



# 空作品評

柴田佐知子

わんわんと羽蟻とび出し日を汚す 中田みなみ

繁殖の時期になると、蟻や白蟻たちは翅を得て「羽蟻」となって巣より飛び立つ。おびただしい数の羽蟻が朽木に取り付いたり、宙をとぶ様子は憂鬱な気分させられる。「わんわんと」という擬態語と「日を汚す」という独自の感受が、この時期の羽蟻の生態と、それによって醸される鬱々とした気分を彷彿させる。

爆音は雲の中よりかきつばた だいじみどり

垂れ込めた雲の上を飛行機が飛んでいることを詠まれたものかもしれない。曇天の日は音がこもり身震いするような轟音を立てることがある。しかし「かきつばた」が咲く頃の雲中の爆音と言われると、福岡市に住む者には街を焼野原にしたB-29の大編隊による空襲を思わせられる。細やかな情をもって業平などによって詠まれてきた「かきつばた」と、「爆音」との取り合わせは、読む者の感受を刺激し異空間をたたみかけてくる。

一本の幹百畳の藤すだれ

矢野百合子

藤棚に蔓を伸ばした大藤。見事な藤棚を、その様が見えるように詠むのはなかなか難しい。藤を見尽くした百合子さんは、その感動を胸の内に沈め、全てを省略して数字によって単純化した。その端的な表現によって絢爛たる日本画のような美を獲得した見事な作品である。

磨かれし廊下月光走り来る あさなが捷

旧家であろうか。「磨かれし」に丁寧な暮らしぶりが窺われる。句の内容は廊下に月光が差し込んだというだけのことである。ところが「月光走り来る」と擬人化したことで、このありふれた景が一転、類句を超えた清新の気が句を貫く。俳句は一語一字で変わり、命が与えられる。

遠泳の頭流るる日本海 小林 朱夏

勿論、泳者は目的地へ向かっているのだが、漂流しているかのようだ。「頭流るる」は面白いとらえ方だ。それを受ける下五の「日本海」によって、人

間はいよいよ小さく見えてくる。

ハンカチに愛別離苦の皺のこる 鳳 蛮華

仏教語の「愛別離苦」は俳句に使うと、取ってつけたような技巧が目につきすぎる嫌いがあるのだが、それを充分に押さえた上での「ハンカチ」との取り合わせがうまい。ここまでくれば、「皺のこる」という技の駄目押しも効いている。情況は不明だが、ほんのりと艶な情感を感じるのは私だけだろうか。

向き変へて郭公のまた鳴きにけり 野畑さゆり

郭公の声は格別だ。ここに居りますよと言わんばかりに「カツコー」とメリハリの効いた大きな鳴声を響き渡らせる。向きを変えることでその声も少し変わったことだろう。小動物へ心を通わせた優しさに満ちた作品。

夏雲雀精一杯の高さかな 山田 正子

空高く舞い上がり、一点に張り付くようにして囀る雲雀。決められたように高さを保つ。「精一杯の高さ」との表現に意表をつかれた。これは対象と一体となるまでじっくりと向き合うことで獲得できる表現だと思う。基盤に写生があるので、句に説得力

がある。

蛇口より桃のかたちに水すべる 織田 高暢  
甘さうな水蜜桃といふ言葉 天谷 翔子

一句目、水道水という素っ気無いもので、珠のごとき桃の美しさをとらえる作者の力量を感じさせる作品。「桃のかたちに水すべる」はうまい。  
二句目、このように詠まれると、確かに私もそう思っていたと言いたくなる。素直な表出が瑞々しい輝きを放っている。

白蟻の穴ごと重要文化財 栗原 京子

「白蟻の穴」と「重要文化財」これだけで俳句になるのだから面白い。二語をつなぐ「ごと」……うまいものである。「重要文化財」を見るたびに思い出す句となることだろう。その他注目した句を次に掲げる。

近景も遠景も山昼寝覚 戸栗 末廣  
涼風や突如ひらめく数学者 古川 夏子  
故郷の記憶は褪せず吊忍 小川 涼  
その小屋はしんと冷たき蛇が棲む 酒井みち子  
緋の牡丹手折りて胸の炎となせる 押田裕見子  
米寿待つ真白き髪を涼とせり 片田 きく

# 空集

柴田佐知子選

ひよつとことなりて今年もどんたくに

子の帰る道まつすぐや麦の秋

比翼塚訪へば藪蚊に纏はれて

炎昼に砲台口を開けしまま

春の鴨逆らふ波もなかりけり

熊本 松田明子

天保の力士の墓や花は葉に

浮見堂浸しここより夏の海

太棹の音が奈落へ夏芝居

道具方の深き奈落の三尺寝

顔中を口に嬰泣く旱梅雨

大阪 田岡千章

抽斗の奥の秘密も微びにけり

青鷺の中七下五思案中

古簾都合悪しきは聞こえませぬ

夜の電話取れば切れたり太宰の忌

梅雨燕農夫の笠を掠めけり

福岡 亀井紀子

一村に降臨伝説楠若葉

朗読の濁声も良し夏座敷

福岡 栗原京子

煩惱のなき人知らずアロハシヤツ

天までと朝顔這はず紐数本

めまとひを合宿の子ら駆け抜けし

道ふさぐ祭囃子についてゆく

白蟻の穴ごと重要文化財

桜鯛どんと据ゑられ棟上る

須恵 長 節子

佛花切りざつとあたりの草をとる

一片の雲に飛び込む揚雲雀

白玉をつくりて母とゐるやうな

老鶯や岩の椅子ある七合目

のぼりつめ神木となる藤の花

福岡 矢野百合子